

ゆるやかなつながりが 守るもの

～近江八幡の地蔵盆から考える～



助成：文化庁 令和4年度 Innovate MUSEUM 事業



ゆるやかなつながりが 守るもの

～近江八幡の地蔵盆から考える～



ゆるやかなつながりが 守るもの

～近江八幡の地蔵盆から考える～

目次

第1章	地蔵盆のむかしと、今。そして未来へつなげるために ～地域コミュニティのあるべき姿を考える～ ……………3
第2章	近江八幡の地蔵盆インタビュー ～コロナ禍にある地域のゆるやかな祭りの現状～ ……………6
	・永原町上のみなさん ……………7
	・出町2丁目のみなさん ……………8
	・為心町中のみなさん ……………9
	・浄土宗 加納山 願故寺 北元明教住職 ……………10
第3章	地蔵石仏の由来と地蔵信仰の広がり ……………13
第4章	近江八幡の地蔵盆マップ ～インタビューと調査から見えてきた地蔵盆の特徴～ ……………17
むすび	ゆるやかなつながりが守るもの ……………23

近江八幡市の地蔵盆の調査は、令和4年度文化庁 Innovate MUSEUM 事業「ケアしあうミュージアム」の一環で実施しました。実施にあたり、成安造形大学の加藤賢治教授、田口真太郎助教に調査と執筆を依頼し、社会福祉法人グロー法人事務局芸術文化部と調査チームを結成して、本書の制作にあたりました。

※地域名は町内会名の表記で統一しています。

はじめに

「ちいさなおまつり」 地蔵盆が守ってきた地域のゆるやかなつながりを 未来へと伝えていくために

2022年7月23日、真夏の暑い日差しが照りつけるなか、ボードレス・アートミュージアムNO-MAからすぐのところにあるお地蔵さんの祠（ほくら）に、ご近所のおじいちゃん、おばあちゃんが1人、また1人と集まってきました。

「いつもなら、お地蔵さんを家の中に運んで、お菓子を食べたりするんやけどね」

「コロナで、この3年はあかんわ」

「永原町上は、子どももいなくなってしまったしな」

そんな声を聞いた住職が、

「いやいや、皆さんまだまだお元気!地蔵盆も大丈夫ですよ!」

と笑い飛ばしました。



私たちが、なぜ地蔵盆に興味を持ち、記録して残そうと考えたのか。

関西地方を中心に継承されてきた地蔵盆という小さなお祭りは、町内会という小さなコミュニティで運営されてきました。参加者にお菓子を配るなど、子どもが主役となるお祭りでもあります。

超高齢社会を迎え子どもが減少するなかで、新型コロナウイルスが広がり、人が集まるイベントは3年にわたって自粛となりました。大きなお祭りである左義長まつりは復活に向けて町をあげて取り組んでいるけど、地蔵盆のような小さなお祭りはどうなっていくだろうという思いがありました。

今回、成安造形大学で宗教民俗学を研究されている加藤賢治先生と町づくりに取り組む田口真太郎先生に調査を依頼して、近江八幡の3つの町内会のみなさんと願故寺の北元住職にお話を伺いました。町内会ごとに受け継がれてきたお地蔵さんにまつわるエピソードや信仰の形、これからどうなっていってほしいかなどを聞き、それらをまとめたのが、このブックレットです。

インタビューを重ねると、お地蔵さんという小さな存在が、地域の人たちをゆるやかに結びつけていることがわかってきました。少子高齢化という問題を抱えながらも、地域でお地蔵さんを守っていくという取り組みが、これからの地域のあり方を考えるヒントになりそうです。

最後になりますが、インタビューにご協力いただいた近江八幡の皆様、この場を借りて御礼申し上げます。

近江八幡に伝わる地蔵盆調査チーム 一同

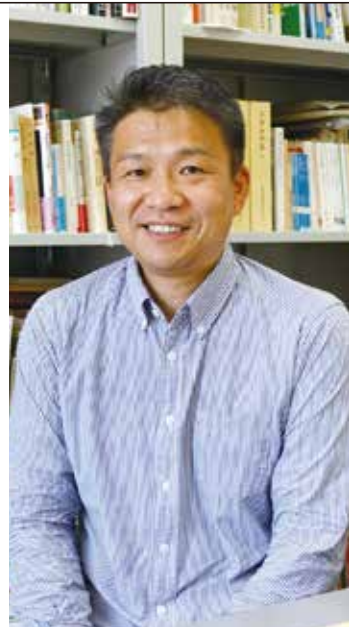


※近江八幡で毎年3月中旬に行われる五穀豊穡を祈る祭り。派手好きの織田信長も町衆とともに踊ったと伝わり、天下の奇祭といわれる。

第1章

地蔵盆のむかしと、今。 そして未来へつなげるために ～地域コミュニティのあるべき姿を考える～

成安造形大学 地域実践領域 教授
附属近江学研究所 副所長
加藤 賢治



町内会の一大イベントだった「地蔵盆」

「地蔵盆」というと京都市内の代表的な民俗行事の1つであると認知されている。夏の風物詩として8月の下旬、お盆休みが明けた次の土曜日と日曜日の2日間、町内会の単位で開催されるというのが、一般的だろうか。本来は旧暦で地蔵菩薩の縁日にあたる7月24日がその日となるが、現在では、新暦の8月24日前後の土日に行われることが多い。子どもの祭りであり、主役の子どもたちが楽しめる金魚すくいやおやつ配り、豪華景品が当たるくじ引きなどのイベントを大人たちが準備する。お寺の住職の読経や百万遍数珠繰り（数珠まわし）、御詠歌の奉納などの仏事的な行事もあるが、どちらかという楽しい催しが中心だ。

筆者は京都市中京区の出身であり、まさにこの「地蔵盆」にお世話になった。お盆休みの楽しい家族旅行が終わり、夏休みも残すところあと少し。宿題も残っているが、それを気にしながら最後の楽しみとして「地蔵盆」があった。もう40数年前の遠い昔の話であるが、筆者が暮らしていた町内には多くの子どもたちがいた。市内の中心部からは少し西に外れた高度経済成長期に出来上がった新興住宅地、いわゆる下町で小さな家がひしめき合っていた。そのような場所で、地蔵盆は活気に満ち溢れた町内会の一大イベン

トであった。筆者の町内の近くにある100戸あまりが入居する新しいマンションでも地蔵盆が行われており、そこには、若い世代の家族がほとんどで、我々以上の盛り上がりがあり、うらやましく思ったことが懐かしく思い出される。

さて、筆者は30歳になった年（平成9年）に近江（滋賀県）に移り住み、そこから近江をフィールドとして、宗教民俗の研究をはじめることになった。研究の内容は多岐に渡ったが、その傍らで「お地蔵さん」と呼ばれる石仏と、それを丁寧に安置する祠を至るところで見かけ、そこで繰り広げられる近江における「地蔵盆」という行事に興味を持ち続けてきた。

これまでに取材した場所は、大津市仰木、今堅田、下阪本比叡社、長浜市の旧市街地、野洲、そして今回聞き取り調査を実施した近江八幡である。現状は、おそらく京都もそうであろうと思われるが、少子高齢化に直面し、長年に渡って続けられてきた大切な行事と理解しつつも、その継承に関しては、様々な不安を抱えている現状がある。

インタビューから見えてきた、 心の拠りどころとしての「地蔵盆」

ここではまず仏教思想、信仰としての地蔵信仰のはじまりと広がり、そこから地蔵会、地蔵祭り、そして地蔵盆へとつながる地蔵盆の歴史などを紐解き、最終的に近江八幡における聞き取りを紹介し、近江における「地蔵盆」の現状を報告するとともに、地域コミュニティのあるべき姿を考えてみたい。

今回の近江八幡における地蔵盆調査とその他現代の地蔵盆の様子を垣間見て感じたことは、子どもの祭りである地蔵盆が、主人公（子ども）の減少によって規模が小さくなり、また、支える人々の高齢化から、その継続も危ぶまれているという現状である。しかし、チームが聞き取りをした町内では、この行事が現代社会において2つの重要な要素を内包していることがわかった。

1つ目は、信仰として町内の心の拠りどころとなっていることである。大まかな括りで見ると地蔵盆は仏事である。読経があり、百万遍数珠くりが行われる。

しかし、地蔵菩薩という仏様が、仏教説話や伝説で語られているように、庶民の身近に存在して、地獄に落ちても救ってくれるという絶対的な救済者であり、無限の包容力を備えている。個人の生老病死という悩みや、苦しみを聞いてくれたり、火の神の側面もあり、町内全体の安全も見守ってくれるという万能の仏様なのである。

病を患い、医師に頼るしかないが、先が見えないどうしようもない不安を和らげてくれるのは、これまで守ってきてくれた、町内のお地蔵さんである。もちろん、お地蔵さんが病を治してくれるわけでもないことは理解していても、何かにすがり、小さくても光が見えるような支えがあることに心が救われるのである。すなわち心の拠りどころという存在なのである。このことは、どの地域のお地蔵さんに対しても共通して語られていた。



出町の地蔵盆（平成28年）

子どもから大人の交流へ 変化するコミュニティの形

2つ目は、地域コミュニティを確認し深める場であるということである。

かつて、地蔵盆には、おじいさんおばあさん、お父さんお母さん、そして子どもたちという親子三代が集まる行事であった。子どもの祭りであることが、大人の結束にも繋がっていたようである。大人たちにとって、子どもの成長を見る機会が、最も幸せを感じる時間であるといえる。普段は家の中での大人との交流であるが、この日に限っては、他の家の大人とも交流する。大人たちも子どもの友だちや、そのなかで遊ぶ我が子の姿を見る。子どもたちも学校では同級生との関わりが多いが、このときばかりは、先輩や後輩との交流がある。遊びや勉強を教えてもらう絶好の機会となっていたという思い出を聞いた。

現代にいたっては、地蔵盆における子どもの存在

がほぼなくなりつつあるが、大人のためのナオライ、すなわち懇親会は重要で、大人の祭りになっているとの声もあった。普段ゆっくり話すことがないご近所の家族との交流が大切であるという認識は、どこの地蔵盆でも見られた。

道路整備、上下水道、電気、ガス、ゴミ収集、教育、福祉などのインフラシステムは、完全に行き届き、便利で快適になった。近世はそれらを全て地域の人々が協力して行ってきたため、地縁の繋がりは必然的なものであった。しかし、現代は全て行政サービスのなかで専門的に行われるため、地域の人々が協力することがなくなってしまった。もちろん、地域の運動会や文化祭などのイベントがその部分を担っている訳であるが、必然性が薄いため、参加者も限られ、継続が難しくなっている現状がある。

最小単位の「地縁」コミュニティ

地蔵盆という行事は、年に一度であるが、お地蔵さんという絶対的な存在を中心として、町内においては参加しなくてはならない行事の1つとなっている。今年は都合が悪いので参加しませんというようなことではない。そういう意味において、地蔵盆という行事は、最小単位の地縁コミュニティの濃さを確認し、さらに親睦を深める場であると考えている。

地域における子どもの見守り、高齢者の一人暮らし、防災、そしてコロナ禍を経て、他の人との関わりの大切さ(利他)が浮き彫りになってきた。そういう意味において、地蔵盆のような行事の存在は、今もう一度見直さなければならぬ時にきていると感じる。

大切であると認識しながらも地蔵盆を実際に継続するためには、地域ごとに様々な課題がある。地蔵盆に限らず、地縁のコミュニティをつなぐ場の必要性は、今後見逃せない重要事項となっていくはずである。



簡略化して実施された為心町中の地蔵盆(令和4年)

第2章 近江八幡の地蔵盆インタビュー

～コロナ禍にある地域のゆるやかな祭りの現状～

近江八幡の旧市街は、約400年前に豊臣秀次が築城した八幡山城の城下町が姿をとどめています。仲屋町(すわいちょう)、魚屋町(うわいちょう)、博労町(ばくろちょう)など、当時の町名が残り、それぞれの町内会に長い歴史があります。今回は、そのなかからNO-MAがある永原町上と、出町2丁目、為心町中の3つの町内会の皆さんと、願故寺の住職にお話を聞きました。

為心町中
ISHIN-CHO NAKA

願故寺の北元明教住職
GANKO TEMPLE

出町2丁目
DEMACHI-2CHOME

永原町上
NAGAHARA-CHO KAMI

★お地蔵さん

インタビューにご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

近江八幡の地蔵盆インタビュー①

ながはらちょうかみ
永原町上
NAGAHARA-CHO KAMI



町内の戸数は江戸期が最盛期だったそうで、42戸という記録があります。現在は22戸。ほとんどの家は、夫婦2名か1人暮らしで、小学生の子どもはいません。地蔵盆の開催日は曜日を問わず、7月23日と24日の2日間です。かつては夜通し行っていたのですが、現在は昼間のみの実施となっています。

インタビューより

過去の地蔵盆

30年から40年前は、多くの子ども(40名ほどいたと思います)が参加して、子どもたちの楽しい夏祭りでした。各家をお地蔵さんが移動して、毎年違う家で地蔵盆をしました。子どものころのことですが、大きな町家が当番だった年に、蔵も含めて家の中を探検するのがおもしろかった思い出があります。

お地蔵さまのお供物は子どもの食べ物、お菓子が中心で、お下がりを配りました。御華足おけそく(丸餅が積まれている)と呼ばれるお供物の印象が強いですね。御膳当番と呼ばれる人がその準備をします。

全体の段取りは一年の輪番である町内会長が仕切ります。年齢を超えた交流がよかったと思います。大人と子どもがその日は心を開いたかたちでコミュニケーションが展開するよい時間でした。

明治維新の廃仏毀釈のときには、地蔵石仏を琵琶湖に捨てたという伝説があります。

現在の地蔵盆

現在は、完全に大人の祭りになっています。お地蔵さんの前で読経はするけど、その後のナオライ(懇親会)が中心です。数年前までは食べ物を持ち寄っていたのですが、最近は町内会の会費で賄っています。家族が寄り合うよい機会となっています。



コロナ前に行われた地蔵盆の様子(令和元年)

コロナ禍とこれからの地蔵盆

コロナ禍において、3年間行事は中止になりました。読経などの仏事的なことのみの実施です。一気には戻らないと思うのですが、徐々に地蔵盆は元に戻っていくと思います。

お地蔵さんは心の拠りどころです。毎日お水やお花が絶えませんが、この文化はなくなってしまうのではないかと思います。30年後、この町内はほとんどが空き家になってしまうのではないかと思います。5軒でも残れば、お地蔵さんは守っていただけます。

近江八幡の地蔵盆インタビュー②

でまち
出町2丁目
DEMACHI-2CHOME



出町2丁目は現在20戸。子どもは4人いるそうです。地蔵盆のときには他家に嫁いだ娘の子ども(外孫)が帰ってきて参加するので、少し賑やかになります。出町エリアは商店街という特徴があり、開催日は月末を避けて、8月3日と4日の2日間に行われてきました。今では8月第一週の土日に行っています。

インタビューより

過去の地蔵盆

お地蔵さんは、天台宗安楽律院の末寺である東福寺に安置されています。住職さんがいない無住のお寺です。

地蔵盆は小学校6年生までの子どもが対象となっていて、子どもの名前を書いた提灯を飾ります。当日は、近くのお寺のお坊さんをお願いして読経してもらいます。読経しているとき、百万遍数珠くりが行われます。この大きな数珠は、お不動さんの縁日に講の人たちが集まって数珠くりをしていたので、それを地蔵盆でも使わせてもらっています。

私たちが子どものころは、年長のお兄さんやお姉さんに遊びや勉強を教えてもらっていました。懐かしい記憶ですね。

現在の地蔵盆とこれから

1年で交代する町内会長が地蔵盆全体の段取りを仕切っています。地蔵盆は夏の懇親会です。将来的には大人の地蔵盆にしようかという声もあがっています。懇親会の大切さを、みんなが理解しているんです。特にコロナ禍で、人が集まることがなくなりました。今後、地蔵盆などの町内の行事が、大切になるのではと感じています。

出町2丁目の町内には、新しい住宅も建ちはじめています。引っ越してきた人にも町内会に加入してもらって、一緒に地蔵盆に参加してほしいですね。町内会という地域社会の活性化、防災のことなど、様々な課題を抱えています。改めて、地蔵盆のような地域の行事を、つなぎ続けていかなくてはと、強く感じます。



令和元年に行われた地蔵盆の様子

いしんちょうなか
為心町中
ISHIN-CHO NAKA



為心町は「上」「中」「元」の3つの地域に分かれています。「上」が32戸、「元」が9戸、そして「中」が13戸とそれぞれ規模が違っていています。今回は、「中」でお話を聞きました。空き家が増えたという「中」地区ですが、最盛期には20戸を数えていたといいます。地蔵盆の開催日程は、8月23日の1日のみです。

◆◆◆◆◆ インタビューより ◆◆◆◆◆

過去の
地蔵盆

為心町中のお地蔵さんは、小さな厨子に入った木造の延命地蔵尊です。元々この地区にはお地蔵さんはなかったのですが、60年ほど前に、地蔵菩薩が「ここに帰りたい」と言ったというお告げのようなものがあり、元々個人の持ち物であった延命地蔵尊を為心町中の町内の地蔵尊として安置したと聞いています。

地蔵盆は子どもの祭りですから、子どもの成長を願う祈りがあります。30年ほど前、私たちの子どもたちが参加していたころは、左義長の山車をつくる費用を稼ぐために、焼きそばやビールなどの飲食物を販売したり、パチンコ台を借りてきて、パチンコを楽しんでもらったりしていました。楽しい思い出です。あのころは、盆踊りも盛大に行っていましたね。

現在の
地蔵盆と
これから

現在、町内に子どもはいません。地蔵盆は大人の夏祭りとなっているのが現状です。当日は、浄土宗専念寺の僧侶に読経をお願いしていて、提灯に絵を書いて吊るしたり、子どもの名前が書いてある提灯を吊ります。外孫でも孫ができれば提灯をつくっています。朝11時から飾りつけをして、14時ごろ僧侶のお参りとともに数珠くり(10年前に古道具屋より寄進)、夕方片付けの後、懇親会という流れです。コロナ禍になってから数珠くりは行っていません。

町内にはお地蔵さんの当番があり、毎朝のお水とお茶とお線香、お花は絶やしたことはありません。毎月、15日と30日に当番と次の当番の家で、道具の引き継ぎが行われています。当番になれば、15日間毎朝お地蔵さんのお世話をします。皆さん、「させていただく」という気持ちでお世話をしていますね。当番だけでなく、町内の人全員が、毎日祠に拝む習慣があることから、それがわかります。

お正月には元日の10時に全員が集まってあいさつするという恒例の行事があります。5分ぐらいのことですが、また、左義長の山車を出すことになっているので、非常に結束が強い町内だと思います。

お地蔵さんを祀ることと地蔵盆という行事は決してなくしてはいけないし、なくなることはないでしょうね。

コロナ前に行われた地蔵盆の様子▶



〈インタビュー〉

成安造形大学 未来社会デザイン共創機構 助教 田口 真太郎

浄土宗
加納山 願故寺
北元明教住職

近江八幡市の12の町内会で地蔵盆に関わっている願故寺は、天正14(1586)年、豊臣秀次の八幡山城築城の際に、安土から移築された浄土宗のお寺です。NO-MAが所属する永原町上の地蔵盆でも読経していただいています。少子高齢化やコロナ禍により、地蔵盆がどう継承されていったらいいのか。仏教行事としての視点を交えて、住職にお話を伺いました。

地蔵盆とお寺の関係

——願故寺の住職をされるなかで、この地域の地蔵盆との関わりについて教えてください。

私は元々、京都府亀岡市の寺の生まれです。父がこの願故寺とご縁があったことで、亀岡の寺と兼務という形で20年ほど勤めていました。父も段々老いてきたこともあり、私が正住職として願故寺に入ったのが平成23年ですから、10年以上が経ちます。令和元年に父が亡くなり、現在は私が願故寺の正住職をしながら、実家の寺を兼務するという形で勤めています。

願故寺が地蔵盆に関わる地域は、永原町上・元、博労町上・中・元、慈恩寺町上・中、縄手町中・元・末、鍛冶屋町、仲屋町上の12か所です。どういう事情でこれらの地域を担当させていた

だいているのかまではわからないのですが、おそらく昔、各町内で地蔵盆をする際にお寺に依頼があり、それから続けられているのだと思います。

この地域の地蔵盆は7月23日と24日にするところが多いのですが、やり方はその町内によって様々です。永原町上は、町内の住居の座敷を借りてお地蔵さんを遷座させて行事をしていましたが、コロナ禍以降は遷座せず、もともとお地蔵さんがいらっしゃる祠に皆さんが集まってお経をあげています。同様に博労町元は、自治会館へお地蔵さんを遷座させていましたが、コロナ後は普段の祠に集まってお勤めしています。さらに、博労町上ではお地蔵さんをお寺でお預かりし、地蔵盆のときに遷座して、各お家が輪番制でお祀りをされていましたが、博労町上・中ともに少子高齢のため、人が集まらず、3年ほど前に私から、博労町上と中、2つの町内が合同で願故寺に来てお勤めをなさるよう提案させていただきました。もともと百万遍の数珠くりもしていましたが、現在はコロナ禍のため、数珠くりは行っていません。



願故寺で預かる博労町上と中のお地蔵さん

地蔵盆という伝統を継承していくために

——これから10年、20年後の地蔵盆や近江八幡の伝統的な町並みはどのように変化していくと思いますか。

お地蔵さんの祠は残ったとしても、地蔵盆という行事そのものが果たして、これまでと同じような形で残るかどうかという心配はあります。もっと簡素化されてしまっているかもしれませんし、地域の問題だけでなく、依頼されるお寺側も住職の後継者問題が深刻です。いずれは願故寺も無住の寺になるかもしれません。

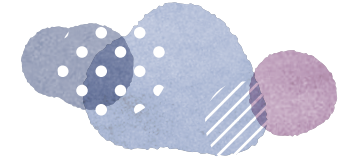
町並みや建物、仏像は目に見えるものなので、人が価値をつけやすいですね。「これは守っていかねばならない」と言うのは簡単です。しかし、信仰や文化というのは、目に見えないもので価値をつけることが非常に難しい。そもそも、価値をつける必要が本当にあるのかどうかという問題もありますが、まずは、目に見えないものを信じられるかどうか、大きな分岐点になると思います。



本堂でライブを開催するなど、時代にあったお寺の役割を模索している北元住職

おそらく、ほとんどの人が目に見えないものを信じていないと思います。伝統的なものを継承していかなければならないと思う人は、本当に少数派ではないでしょうか。そもそも、地蔵盆などを残すべきかどうかというところに意識が向いているのかどうか。今のままでは難しいと思います。私たちが将来のために地域の伝統を継承して

いかなければならないと考えていても、この取り組みが大事だと多くの人が認識しないといけない。そのためには、私たちのような宗教家の力も必要になってくると思います。あぐらをかいてはダメなのです。地蔵盆でお地蔵さんにお勤めをしたり、そこに魂を入れたり抜いたりすることは宗教家の役割ですから。



お地蔵さんが伝えたいメッセージ

——この地域では地蔵盆が今日まで続けてこられていますが、生活に身近な町内でお地蔵さんをお世話することの大切さや意味について、お話をお聞かせください。

近江八幡のように町中にお地蔵さんがあちこちに立っていらっしゃることは、とても意味のあることだと思います。道行く人たちが、「ああ、ここにお地蔵さんがいるな。きれいな花を誰かが供えているのだな」と感じることができます。そういったことから、すべてに生命が宿っているということに気づかされることも大事だと思います。

お地蔵さんの前を通る際に必ず手を合わせて横切のおじいさんがいらっしゃいます。そのような姿を見ると美しく感じますし、私もできるだけそれをやろうと思い、お地蔵さんに気がついたら手を合わせるようにしています。こういう習慣が身につくことで、そこにお地蔵さんがなかったとしても、すべてのものに手を合わせることができる人間になっていくわけです。

神仏に合掌することができる人は、信仰を深めることができます。お父さんやお母さんに合掌することができる人は、親孝行の気持ちを育むことができます。モノに合掌できる人は、もったいないということを知り、モノを大切にすることができます。そして、尊敬する人や目標とする人に手を合わせることもできる人には、敬いの心が芽生えます。自分自身に対して、手を合わせることも大事です。よく自分の胸に手を当てて考えなさいと言いますが、その手を合掌してみればいいのです。すると、自分を見つめ直すことができるはずで、そして、お互いに手を合わせることで、最後には幸せを生むことができると思います。

地蔵盆というお祭りも、手を合わせる環境を作ってください。お地蔵さんは、決して何もおっしゃらないけれども無言の説法をされていて、我々のことを願ってくださっているのだと思います。「安全に明るい道を行きなさいよ」とか、「元気に暮らさないよ」ということを、お地蔵さんは願ってくださっているのではないかと思います。



旧市街地のなかで、暮らしを見守る役割も果たしている



滋賀県愛知郡愛荘町に祀られている『千体地蔵』の石仏群

第3章 地蔵石仏の由来と地蔵信仰の広がり

成安造形大学 地域実践領域 教授
附属近江学研究所 副所長

加藤 賢治

石造地蔵菩薩は小型阿彌陀如来

「講」や各種の祭など地縁で結ばれた人々による民間信仰の偶像（礼拝の対象となるもの）については、掛け軸や、札、木造の仏像、神像、自然石や樹木、そして石造仏などがある。今回取り上げている地蔵盆という行事に登場する偶像は、一部を除き、ほとんどが石造りの地蔵菩薩である。

なぜ、石造地蔵菩薩なのであろうか。

滋賀県の郷土史家瀬川欣一氏は、その著書『近

江 石のほとけたち』（かもがわ出版 1994年）において興味深い見解を述べられている。現在、我々が地蔵盆で礼拝する「石のお地蔵さん」と呼ばれる石造地蔵菩薩の大半は、阿彌陀如来の坐像であるという。

筆者も以前、お地蔵さんといわれる石仏を拝ませていただき、前掛けの下を覗かせてもらおうと、確かに坐像であり、足の上に前で手を組んで来迎印を結ん

でいるのを確認したことがある。地蔵菩薩の基本形は立像で、右手に錫杖を、左手には宝珠を持っているが、その姿ではなかった。

瀬川氏によると、一般に「石のお地蔵さん」と呼ばれている仏像は、鎌倉時代の後期ごろから、室町時代の末期にかけての250年ほどの間に、庶民が先祖供養のために墓石として造立した小型阿彌陀石仏であるという。

中世の庶民は、当時は火葬が主であったようであ

るが、そのお骨を埋葬した墓の上に、魂が極楽浄土へ生まれ変われるようにという浄土思想から、像高数十センチの阿彌陀石仏と一石五輪塔を添えて置いたのだという。石仏を購入できない貧しい庶民は木片に五輪塔と阿彌陀仏を描いたかもしれないが、それは腐敗してしまい現在確認することはできない。

次にその阿彌陀石仏が、なぜ地蔵菩薩として礼拝されるようになったのかという疑問が湧いてくる。

大地を自分の蔵とする地蔵菩薩

その答えは、11世紀に園城寺（三井寺）の僧実睿が撰した仏教説話『地蔵菩薩靈驗記』にみることができる。

「大地は鉱石や作物、樹木などあらゆる宝を生み出して、決してその働きは尽きることがない。同じように地蔵菩薩は無限の功德を生み出し、衆生を救って、そのはたらきが決して尽きることがない。だから地と名付けられる。また、蔵とは貯えて積むという意味である。世間で蔵の中に財宝や穀物を貯えて、尽きることなく大慈悲の教えで導き、衆生の煩惱の苦を除き、仏心の萌芽を成長させる。そこで蔵と名付けられる」

「地蔵」という名前は、サンスクリット語でクシティ・ガルバといい、クシティが「土地、大地」、ガルバは「胎、蔵」という意味があり、地蔵とは「大地を自分の蔵として、その大地に眠る素晴らしい財宝を持って衆生を救う」菩薩であるという。

中世に、墓標として盛んにつくられた小型阿彌陀石仏群が、やがて災害等で地中に埋まり、近世に地蔵信仰が民間に広がり始めたとき、地中から掘り出され、あるいは半分地中に埋まった阿彌陀石仏を、地中という別世界から現れた仏、すなわち地蔵石仏で

あると考え、それに化粧をして、祭りはじめたのが石造地蔵尊の起源であり、やがてはその石仏をもとに地蔵祭り、地蔵盆へと繋がっていったと考えることができる。

特に近江は室町時代中期に、一向宗と呼ばれた浄土真宗の布教活動が活発で、浄土真宗の門徒になるものが急増した。浄土真宗では、阿彌陀浄土の思想を中心とし、魂の救済を最も大切にすため、墓石をもとにした先祖崇拝を軽視した。その結果として、門徒は墓を持たなくなり、これまでの墓も荒廃していったと考えられている。したがって、それまで墓石となっていた多くの阿彌陀石仏が、地中に埋もれていったのである。



永原町上の祠に祀られている地蔵石仏

地蔵信仰のはじまりと広がり

「石のお地蔵さん」と呼ばれる石仏の大半が小型阿彌陀石仏であり、江戸時代の地蔵信仰の広がりとともに、掘り出された路傍の石仏（阿彌陀石仏）が「石のお地蔵さん」となって町内や集落の辻や道端に祠が建てられ、丁寧に祀られるようになった。

地獄の閻魔王と地蔵菩薩が一体であるという信仰や、魂が転生する「地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天」の六道すべてに地蔵菩薩が存在して、そこに落ちた魂を救うという考え方が広がった。皇族や貴族と違って一般庶民は仏教という作善（読経や作

仏、写経、布施などを行って徳を積むこと）ができないため、極楽浄土へ行くことはできず、地獄を含めた六道の冥界を彷徨わなければならないとされていた。したがって、生前から、地蔵菩薩を信仰して、地獄に落ちても救ってもらおうという考え方が広まっていった。その広がりのおかげとして「地蔵和讃」の流行があげられる。和讃とは、いわゆる仏教的な内容を歌った歌謡である。その地蔵和讃の冒頭と内容を以下に紹介する。

〈西の河原の地蔵和讃の冒頭〉

帰命頂礼地蔵尊　これはこの世の事ならず
死出の山路の裾野なる　西の河原の物語
聞くにつけても哀れなり　この世に生まれし甲斐もなく
・・・

〈西の河原の地蔵和讃の内容〉

「幼くして亡くなった子どもたちは、いったん賽（さい・西・西院）の河原に集まって、幼いために、これまで徳を積むことができていないので、河原で涙を流しながら石を積んで、お父さんのため、お母さんのため、兄弟のためと積んでいく。そこに地獄の獄卒が現れ、ここを娑婆と認めて甘えるなど石積みを蹴散らす。幼子たちは、あまりの悲しみに涙を流し許しを乞うと、そこに地蔵菩薩が出てこられ、今日より後は我こそを冥土の親と思いなさいといって幼子を抱きかかえ、哀れんでくれる」



出町に祀られている地蔵石仏は子ども程の大きさがある

現代の我々であっても目頭が熱くなるような話であるが、この内容の和讃が、単調な二節を繰り返して室町時代の中期以降に人々に歌われた。乳幼児や幼児の死亡率が高かった当時、母親たちがこの和讃を感動の心持で聴き、悲しい心が救われたと容易に推測できる。おそらく、女性の大半が、この悲しみを背負っていたと考えられ、地蔵和讃の救いは、そういう意味で、急速に広がっていたのであろう。

愛する我が子を次から次へとなくした母親たちは、賽の河原の物語を我が子の苦しみとして受け止め、死んだ子の乳の匂いと唾液の染み込んだよだれ前掛けの匂いを地蔵菩薩に嗅いでもらい、「この匂いの子が賽の河原におります。どうぞこの匂いがする我が子を、大勢の幼子とともに救ってくださいるようにお

願います」と一心不乱に祈り続けたと想像できる。

以上のように、地蔵菩薩が、六道のすべての世界、特に地獄に落ちた亡者を唯一救ってくれる菩薩であるからこそ、生前に礼拝するというにはじまり、地蔵和讃に歌われた幼子を救ってくれるのが地蔵菩薩であるということから、中世半ば以降、地蔵菩薩に対する庶民の信仰が爆発的に支持された。それだけでなく、六十六部回国巡礼や修験道との結びつきなども全国に地蔵信仰が広がるきっかけとなった。そして、地中から現れた（掘り起こされた）地蔵石仏をよりどころとして、地蔵講、地蔵祭りから地蔵盆という行事とともに地蔵信仰が地域に定着していったと考えられるのである。

第4章 近江八幡の地蔵盆マップ

～インタビューと調査から見てきた地蔵盆の特徴～

「近江八幡の地蔵盆マップ」は、地蔵盆が地域の人や文化に対してどのような役割を果たしてきたのかを紐解く手がかりです。NO-MAの近隣

地域で地蔵盆をおこなった地域・12名と、願故寺の住職へのインタビュー内容をもとに、重要なキーワードを抽出し制作しています。地かな祭事がなにを守ってきたのか。これからの時代における地域コミュニティのあり方を考える手がかりとなる地図です。

地域の行事

キーワード1
地域の宝である子どもが中心に置かれ、地域みんなで成長を見守り、大切なことを学ぶ

キーワード2
年齢も性別も関係なく、みんなが集まり楽しめる夏の思い出

機会をつくる
P19 へ→

お地蔵さん

キーワード3
お地蔵さんはどんなときも見守ってくれている拠りどころ

キーワード4
お地蔵さんが人と人、人と地域のご縁を結ぶ

心をいやす
P20 へ→

地域の人々

キーワード5
町内を見守るお地蔵さんのお世話をさせていただいている

キーワード6
年長者の背中を見て、お地蔵さんを守る文化が継承されていく

文化を守る
P21 へ→

次世代

キーワード7
どんな状況でも、お地蔵さんを地域の人たちで守り続けることに意味がある

キーワード8
時代にあった伝統行事への付き合い方の模索

形を変える
P22 へ→

自分の地域が大切に守ってきた、心の拠り

地蔵盆は、自分の地域を深く知ることができる年に一度に苦しみ、そのたびにになにかしらに救いを求めてきた歴史が蔵盆では、普段自分たちの町内を見守っているお地蔵さんだけ行事です。その小さな土着の行事は、独自の歴史と想

どころとなる文化を知ることができる

の貴重な機会です。かつて、戦さや飢饉、疫病などあり、そのなかの1つにお地蔵さんがあります。地を、子どもも大人もみんなで一緒にお世話させていただきが宿る、町内みんなの心の拠りどころなのです。



地域の行事

機会をつくる

キーワード1

地域の宝である子どもが中心に置かれ、
地域のみんで成長を見守り、大切なことを学ぶ

地蔵盆は子どもが主役の伝統行事です。少し前まで、子どもは早くに亡くなってしまふことが多かったことから、地域の未来を担う子どもを地域の宝としてお地蔵さんとともにみんで見守ってきました。今でも、子どもや孫が生まれたら地蔵盆で提灯を飾る町内もあります。また、子どもたちは大人とたくさんしゃべることで、普段は教わらない良し悪しや身近な地域の歴史を知る機会にもなっています。



キーワード2

年齢も性別も関係なく、
みんなが集まり楽しめる夏の思い出

地蔵盆は子どもたちが楽しむ夏祭りとなるように、大人たちがさまざまな催し物を用意する場です。夏休み中の子どもたちが地蔵盆で集まり、同級生だけでなく年齢の違う子どもたちと楽しい時間を過ごします。子どものためにいろいろ用意することを通じて、実は大人もしっかり楽しめます。少子化が進む地域では、町内の慰労会として女性も男性もみんなで楽しむ、かけがえない夏の集まりです。

お地蔵さん

心をいやす

キーワード3

お地蔵さんはどんなときも
見守ってくれている拠りどころ

子どもを中心とする地蔵盆で祀るお地蔵さんは、それ自身が子どもの守り神です。地元の人にとって、なにか困ったことや迷うことがあれば、まず手を合わせに行く最も身近な拠りどころでもあります。また、お地蔵さんは普段から町の一角の祠から、町内や道行く人たちの安全を見守ってくれています。私たちはお地蔵さんに手を合わせてお願いごとをしたりするのですが、逆にお地蔵さんが私たちのことを願ってくれているのかもしれない。



キーワード4

お地蔵さんが人と人、
人と地域のご縁を結ぶ

人口減少や核家族化によって、地域における人と人とのつながりの希薄化が問題になっています。さらにコロナ禍で交流が難しくなり、地蔵盆を通じて集まれることの大切さに気づかされます。子どもが少なくなり空き家も増えてきた今、地蔵盆は町内に限らず町外に住む子どもや孫たち、これから移住してくる人ともゆるやかにつながる貴重な機会となります。お地蔵さんが人と人、人と地域とのご縁を結んでいきます。

地域の人々

文化を守る

キーワード5

町内を見守るお地蔵さんのお世話をさせていた

お地蔵さんは町内のシンボルとして、みんなでお花やお水のお世話をしています。町内の人が当番で毎日行っており、何十年も続いています。少子化で子どもが町内からいなくなってしまうと、お地蔵さんのお世話をやめることはありません。また、世話をする地域の方々は信仰する宗教や宗派に関係はなく、お地蔵さんのお世話をしなければならないのではなく、お世話させていただいているという気持ちで取り組まれています。



キーワード6

年長者の背中を見て、お地蔵さんを守る文化が継承されていく

子どもたちがお地蔵さんを大事にする気持ちは、お世話を続けていけば教わることもなく、自然と身についていきます。なぜお地蔵さんに手を合わせるのかと疑問が芽生えたら、きつおじいさんやおばあさんがそれに答えてくれるでしょう。そこそこの歳になれば、お世話の手伝いもすることになります。地域の年長者の背中を見て、次の世代へお地蔵さんを守る文化が自然と引き継がれていきます。

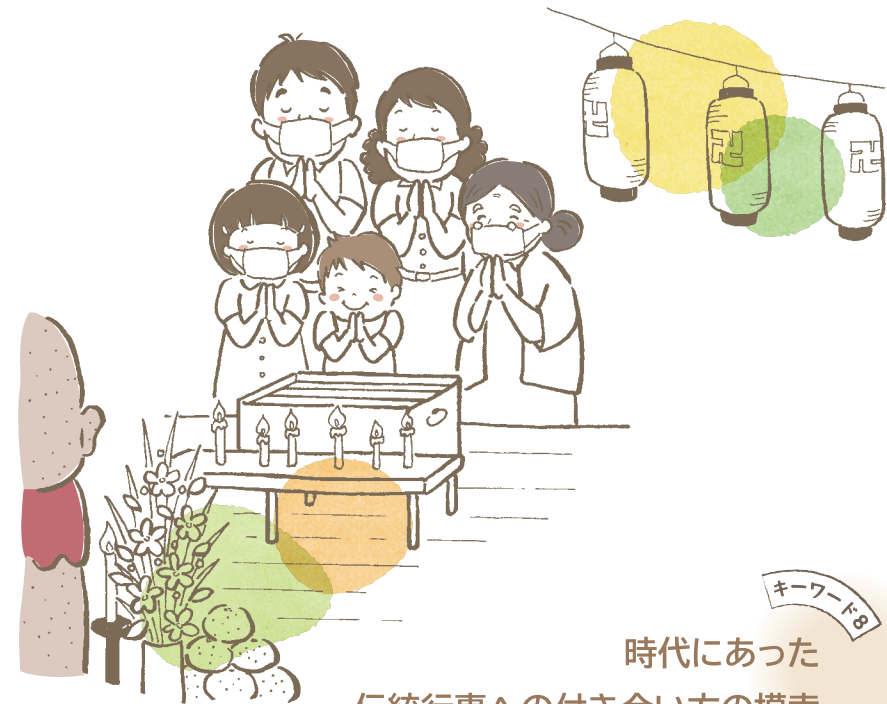
次世代

形を変える

キーワード7

どんな状況でも、お地蔵さんを地域の人たちで守り続けることに意味がある

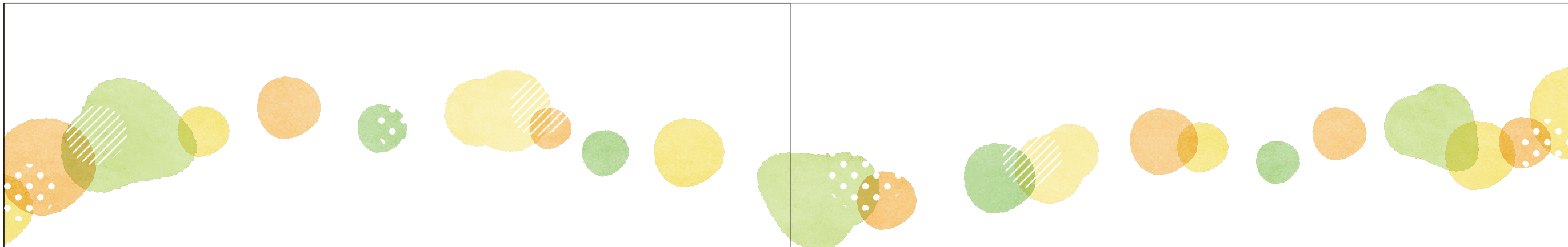
少子化で子どもが少なくなっても、コロナ禍で密になることを避けなければならないでも、地藏盆は続けられてきました。かつては賑やかな夏祭りだったこともありましたが。今は賑やかにできなくても、子どもの名前が入った提灯を飾るなどしながらお参りだけはみんなが続けています。年に一度の地藏盆は、地域のつながりや拠りどころに気づかせていただける大切な行事だからこそ、どのような状況でもお地蔵さんを守り続けることに意味があります。



キーワード8

時代にあった伝統行事への付き合い方の模索

現代社会は伝統行事への興味が薄れ、信仰から離れてきています。親が興味を示さないと、子どもも自然と伝統文化に目を向けなくなっていきます。コロナ禍でさらに、面倒な行事を取りやめて楽な方を選ぶことが危惧されています。そのようななか、地藏盆が脈々と続いてきたのは、誰か1人でもお花やお水をあげ続ける人がいたからです。状況が変化しても、その時代に合った地藏盆のやり方で、お地蔵さんとお付き合いできる方法を考え続けていくことが大切です。



むすび

ゆるやかなつながりが守るもの

子どもが少なくなり、高齢化が進み、コロナ禍が直撃した今、地蔵盆を記録していくことは重要なことだと考え、この企画を立ち上げました。インタビューを進めていくにつれ、予想を超えるポジティブな声が集まりました。“納涼祭は中止になっても、地蔵盆は続けていた”“子どもがいなくても、大人たちだけでやっている”“将来、数軒しかなくなっても、やめることはないだろう”などなど。こうなると気になってくるのは、みなさんがどんなときでも地蔵盆を続けていこうとするのは、どうしてだろう、ということでした。

詳しくは第4章の地蔵盆マップに書かれているのですが、あえて一言にまとめるならば「ゆるやかさ」がキーになっているようです。時代に合わせて自由に変化するし、大人たちも肩肘張らず集まることができる。そして、そのゆるやかさを生んでいる秘密は、地蔵盆の主役である「子ども」と「お地蔵さん」にありそうです。みんなで守っていく存在が中心となることで、周囲の大人も守る人としてみんな平等に集まれる。年齢も性別も超えて、顔の見える同じ地域で生きる人たちが、自然と結び付いていき、互いに気にしあいケアしあう。きっと、普段は意識されないこういったつながりが、変わらない日常を支えているのでしょう。

また、みなさんのお話を聞き、考えを巡らしていく中で見えてきたものの一つに、NO-MAが掲げる、境界をなくしていくこと、との共鳴もありました。そして、この取り組みを進めたことで、同じ地域にある美術館と地域においても、互いに気にしあいケアしあう働きが生まれたように思います。

近江八幡の古い町屋が並ぶ一角にある小さな美術館として、この地域とともに何ができるのか。お地蔵さんがもたらしてくれた、ゆるやかなつながりをヒントに、これからも取り組みを進めていきます。

インタビューにご協力いただいた皆さん（順不同・敬称略）

《永原町上》山本有司、山本敏雄、高嶋道夫、伊寄敏、本間繁利
《出町2丁目》岡村益夫、川崎勇、森谷伸子
《為心町中》五十子英雄、佐々木常雄、川部清、高田浩次
《願故寺住職》北元明教

主催：ケアしあうミュージアム事業実行委員会

構成団体：ボードレス・アートミュージアムNO-MA(社会福祉法人グロー（GLOW）)、
滋賀県（県立美術館）、近江八幡市（総合政策部文化振興課）、
社会福祉法人近江八幡市社会福祉協議会（地域福祉課）、
一般社団法人近江八幡観光物産協会、国立民族学博物館グローバル現象研究部、
NPO法人はれたりくもったり、滋賀県施設・学校合同企画展実行委員会

助成：文化庁 令和4年度 Innovate MUSEUM 事業

ゆるやかなつながりが守るもの

～近江八幡の地蔵盆から考える～

2023年3月5日発行

制作・発行 ケアしあうミュージアム事業実行委員会

発行責任者 牛谷正人（ケアしあうミュージアム事業実行委員会 実行委員長、
社会福祉法人グロー（GLOW）理事長）

執筆 加藤賢治（成安造形大学）、田口真太郎（成安造形大学）

事務局 赤澤誉四郎、西野裕貴、横井悠

デザイン・イラスト 5508 アトリエ 藤林麻弥

発行所 ケアしあうミュージアム事業実行委員会

事務局 社会福祉法人グロー（GLOW）法人事務局芸術文化部
〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦 4837-2
TEL 0748-46-8100 FAX 0748-46-8228